

紀伊水道で底びき網に入った“どま”

環境増養殖担当 酒井 基介

key word : 環形動物, 紀伊水道, 棲管, 底びき網, どま

平成 21 年 5 月 11 日に小松島漁業協同組合から 1 本の電話が水産研究所に寄せられました。その内容は紀伊水道で操業していた底びき網漁船が正体不明の“どま”を引き上げてきたので何なのか調べて欲しいというものでした。ここで言う“どま”とは、海底に堆積した泥状の物の総称として、本県の漁業者が使っている言葉です。通常、泥は網から抜けていきますが、“どま”は泥状ではあっても網に引っかかってしまいます。

漁業者によると今回の“どま”は紀伊水道の広範囲にわたる海底に分布しており、時には網が“どま”の重さで引き上げられないこともあるそうです。また、網に付着した“どま”は水で流してもなかなか洗い落とせないそうです。今回と同じ“どま”は過去にも見られたそうですが、今年のように大量に発生するのは珍しいとのこと。こういった物が大量に入るとは、網がしっかりと海底を搔いているという技術の高さの表れなのですが、被害が大きければ漁具や漁法の改良もしくは調整が必要かもしれません。

とりあえず今回の依頼は、“どま”の正体は何かということです。写真 1 と写真 2 のように外観は一見すると泥の塊ですが、指先でこねて触感を確かめると最初はザラザラしますが続けて触っていくと柔らかい感触もあり、太さ 2mm くらいの繊維質の周りに砂や泥が付着しているような感じです。



写真 1 小型底びき網の袋網に付着した“どま”

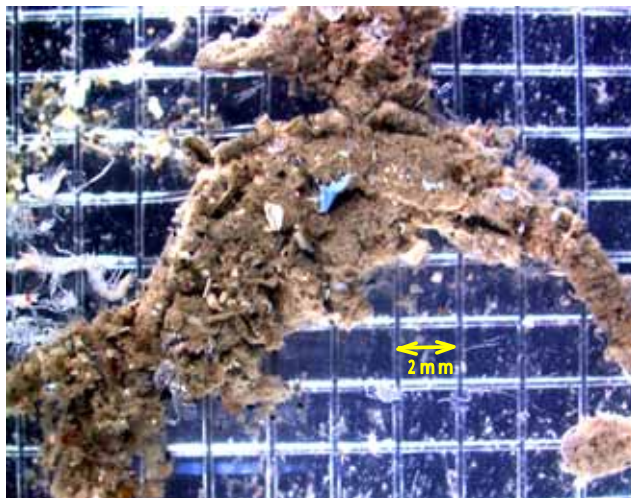


写真 2 “どま”の拡大写真

次にそれを海水で数分間洗浄して周りの泥をある程度落としてやると、なにやら紐状の物が多数現れてきました(写真 3)。



写真3 海水で洗浄した“どま”。繊維質状の物が多数絡み合っている。

さらに超音波洗浄を施し、泥を落としたものを顕微鏡観察してみると、繊維状あるいは綿状のものに砂粒や貝殻片など様々な物が付着しており、ますます正体不明の度合いが強まっていきます(写真4)。



写真4 付着していた泥を除去した“どま”。繊維状の物に貝殻や砂が付着している。

ところが、分かる人が見ればすぐに当たりは付くもので、当水産研究所の U 氏は写真3を見た段階で、「環形動物の棲管では？」との見解を示しました。環形動物とは一般的には細長い円筒状の動物群のことでゴカイやミズが該当します。また、棲管とは管のような巣穴のことです。そこで環形動物の専門家である独立行政法人水産総合研究センター水産工学研究所の玉井所長に写真を送付して意見を求めたところ、「環形動物の棲管だろう。泥や繊維質の棲管であることから多

毛類の一種と思われる。」との返事が返ってきました。残念ながら写真のみでの判断であり、巢の主も既になかったことから、生物の種の特定には至りませんでした。

今回の水産研究所の対応は漁業被害の軽減に直結するものではありませんが、これまで不明であった事象を解明して情報を蓄積することは、時として発生する自然界の異常現象への対応や水産業の発展のためにも有益ですから、棲管が“どま”の土台になりえることが分かっただけでも大きな収穫でした。

最後に、今回の“どま”のサンプルや情報を提供くださった小松島漁業協同組合の漁業者の方々、水産工学研究所の玉井所長に厚くお礼申し上げます。